

奈良言友会会報

まほろば



第8号

吉野川 宮滝離宮

平成25年7月28日発行

私の楽しみ

会話の楽しみ

松井 保典

年を重ねるにつれ、身の光景が夕暮れに近づいていくのを感じる。人間関係も一人二人と欠けていくのは自然の成り行きだとしても、淋しい限りだ。老いは孤独の道を行くものだけれども、楽しみを削かれた人生なんて考えたくない、生きていることをないがしろにはしたくない。言友会と縁が出来たのは思いもかけぬ事ではあったが、今では心情的に定着している。私は人との出会いを大切にしている。会話はいのちであり、人と人をつなぐのは言葉である。だから縁があれば必ず話は繋ぐようにしている。結果はどうであろうとも、私の楽しみは、コミュニケーションする事である。それが吃音矯正の核になっている。話しづらい時は「ぼく、どもるくせがありますねん」と私流のさらけ出して会話を楽しんでいる。

お酒

笠倉 毅昭

怒られても、失敗しても、落ち込んで、仕事をがんばれるのはお酒のためかもしれない。ほぼ毎日、仕事終わりのビールは心も体も癒してくれた。一人でダラダラ飲むお酒はけっこう好きだ。下手くそな三線を弾きながらや、お笑いのテレビやDVDを見ながら飲むのは幸せなひとときである。週末となると気の知れた友人とお酒。笑えば元気になれる。仕事を辞め、ST養成校に通う現在は、その楽しみは月に一回あればいいほうで、お酒を口にすること自体めっきり減ってしまった。でも、月に一回のそのお酒を飲む場や、飲む相手、飲み方、すべてを大切にすることになった。貴重な時間を実感できる。「楽しみ」こそ変わらないが、それを全力で楽しめるようになった。

私の好きな事

寺田 純子

漠然と自分の好きな事と考えたらその都度色々変わっていますが、やはり一番好きな事は気の合う友達と楽しくお喋りしたり食事を楽しみ愚痴を吐き出す事。旅行にも行きたいのですが、子供にまだまだお金もかかるし今はささやかな楽しみを見つけるようにしています。それと仕事での楽しみと言うかやり甲斐を感じるようになりました。デイサービスの業務もしており利用者さんのケアはもちろん昼食の支度もしています。基本手作りです。決して料理が好きとか得意ではありません。一応主婦ではありますが、それなりの物しか作れないので最初は皆さんの反応が心配だったのですが、ほぼ完食され喜んでもらっています。お年寄りの背景を見てみると独居の方も多く食事は惣菜や弁当で済ませていると聞きます。うちのデイサービスで素朴な食事ですが温かな食事を皆さんと談笑しながら召し上がってもらう事がとても良い時間を過ごしてもらっているのだと実感しています。利用者さんから「美味しかったよ」と言ってもらうと嬉しく、次は何を作ろうかなと料理の本や番組が目がいくようになりました。とは言えこれも仕事なのでしんどい時もありますが利用者さんの笑顔を見たく献立を考えるのも楽しみになってきました。最後に、これで料理の腕も上がればいいのですが・・・

お酒で暮さ晴らし

西村 泰宏

大友旅人の酒を讃むる歌十三首の中のひとつに『しるし 験なき物を思わず ひとつき 一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし』とある。大まかな意味としては、あれこれつまらない事を考えるくらいなら一杯の酒を飲んでいる方がましだ、となるらしい。遠の朝廷とよばれた大宰府に長官として赴任した旅人にとって、奈良の都を離れることは左遷であったのだろう。毎夜酒に救いをもとめ、嘆きと愚痴を漏らしながらの憂さ晴らしである。総じて酒飲みは昔も今も変わらない。旅人の心境に思いを馳せ、酒を飲むことは私の楽しみの一つである。日本酒は人生を語る、ウイスキーは哲学を語る、そしてワインは愛を語る、などとウンチクを言いながら飲むほどに酔酩し、失敗談は数知れず。最近ではビール好きが高じてか、痛風とも仲良くお付き合いをしている。ちなみにビールは未来を語るそうだ。さて、今宵はどなたと何を語ろう。私の趣味で最高のレベルまで達してやめた。いや、辞めさせられた。この言葉も適当でないかもしれない—それは将棋である。小学4年生から始め中学では先生とよく対戦したものである。会社に入り寮に入りやはり強かった。多くの寮があり寮対抗戦にも代表が出た。そして200人の将棋愛好家で8位まで入った。自身過剰で、ある将棋クラブに試し試合にいった、しかしそこで起こった事が原因で将棋の事は封印している。それは、そのクラブの先生がこの子とやっとはと、それはまだ小学生4年生。私は少々舐めていた一回戦負け少し本気に。しかし2-3連敗しかも完敗である。ショックがきつかった。こんなに簡単に負けるとは、しかもこれまでの試合と違う自分でも認める惨敗である。私はこれが最後で将棋はやっていない。いまだに将棋のことは話していない。多分これが初めてかも
^^WWW

例会報告 6月2日(日)

第1部 話し合い

担当・報告 辰巳 参加11名

予定していた発題者が都合で参加できなかったため、その人の分も私が担当しました。盛りだくさんですが、次の3つの発題についてのべます。

(1) 吃音での最近の体験

私は、回転すしでインターホンでの注文がむずかしかった。最近、モニターで画像を選んで注文できるようになり、吃音者にとって大変便利になりました。

他のひとからは、コンビニで「トイレを貸してください」と言いにくかった、職場で調子の悪い時は「おはよう」と言われて返事ができなかった、駅の切符買い、電話で困った話、などいろんな話がでて、共感しながら、それらへの対応について話し合いました。

(2) 吃音よりつらい体験

私は脳梗塞を患い、口がきけず、手足の自由が奪われ、仕事もできないという、経験をしましたが、それは吃音よりももっとつらい経験でした。世の中には病気や障害などさまざまな問題で辛い経験をしているひとが大勢いることを知っていけば吃音の辛さも軽くなるのではないのでしょうか。それに対して、吃音の辛さは当事者でないと分からないもので、吃音と他の病気や問題の辛さを比べることはできないとの意見もでていました。

(3) 吃音への社会的支援について

今、全言連で行われている社会的支援検討委員会の取り組みについて説明がされた後、話し合いました。私は、いろんな難病その他の障がいの支援の費用がわかり、吃音の支援費までは出ないのではないか、吃音の重さの認定は困難などの意見を述べました。それに対して、社会的な不利、不便が大きい吃音者に対しては支援が必要との意見もでました。

第2部 最近の吃音研究事情

担当・報告 青木 明大

吃音はまだ原因やメカニズムなど分からない事が多々あります。そのため、吃音について他人に説明するとき、曖昧な言葉や持論で説明していないでしょうか。私は流暢でなくても正しい言葉でそれぞれが吃音について周りの人に説明する事が、吃音の一番の啓発になると考えています。そこで、京都大学大学院で吃音研究をされている京都言友会の飯村大智さんにお越し頂き、ご自身の研究と吃音研究の現状についてお話し頂きました。内容については割愛しますが、様々な研究事例についてお話を聴く事が出来ました。会員だけでなく、飯村さんの講義を聴きにいられた言語聴覚士の方からも、勉強になったと仰って頂きました。当事者団体として微力ながら、臨床の方のお役に立てるような例会を行えた事を嬉しく思います。吃音の啓発だけでなく、吃音について正しく知識を持ち正しく悩む為にも、定期的に吃音について学ぶ場を設けたいと思います。

<感想>

- 吃音の症状や種類、脳機能との関わり等、難しいことは分りませんが、大体必要なことは理解できました。これらを意識しながら、メンタル面、機能面の改善に活かしていけたらと思いました。
- 脳機能の視点から、吃音について分析していただき、今一度、吃音を客観的に認識することができました。内容は難しかったですが、日常生活における吃音と向き合う上で何らかの参考にはなりました。
- 話を適直振っていたのが、よかったです。発表の感想とか、内容的にどのくらい理解できたかが、気になります。
- 話が大略、理解できたわけではない。吃音者に限っても理論的な解説になると、情緒的には分かったつもりだが、説明はお手上げた。結局、自身の体験から理解を深めていくしかない。ただ、そのことがわかる上で戦力になっていることを実感している。
- 科学的な知識を得ることのできる有意義な発表であった。
- 吃音者の脳のしくみ等がわかってよかったです。
- 大変興味深い内容でした。もっと時間をかけて脳研究に関するお話を聞ければとも思いました。言語聴覚士として吃音に悩む方に出会うことも多くなってきていますので、今後も勉強を続け、何か少しでも、お力になれることができるようにと考えています。ありがとうございました。
- 自動販売機（券売機）が増えて、吃音者でも世代間でも吃音の体験に違いがあると思った。名前なし。
- 前半の話合い。「吃音で困ったこととそれへの対応」ではそれぞれの体験が聞けてよかった。発題者の病気の体験談から、吃音の問題を他のいろんな病気や障害と相対化してみる視点も大切だと思った。後半の脳機能と吃音の話は、難しさはあったが、自分なりに理解できた。自分の吃音の状態と合わせて考え、興味深かった。

例会報告 7月7日(日)

第1部 話合い

担当 笠倉 報告 場

参加10名

笠倉さんの司会で次の2点について話し合いました。

- (1) 言友会に何を求めるか、についてそれぞれ述べてもらった。以下のような意見がでました。
 - ・吃音の改善
 - ・母親の集まりがもてたらよい（保護者）
 - ・幅広い活動の場であればよい。
 - ・言友会に集う人が仲良くなれるように親睦会などをする。
 - ・楽しい、役に立つなど行きたくなる魅力あるところになればいい。
- (2) 言友会の目標について、それぞれ考えるところを出してもらった。以下のような意見がでました。
 - ・コミュニケーションの能力を高める。
 - ・吃音に対して正しい知識をもってもらう
 - ・例会を活性化させる（マンネリ化しないよう）。
 - ・野外活動をすすめる
 - ・他のグループとの交流。HPの掲示板での交流。
- (3) 活動の目標について、笠倉さんから以下のような具体的な提案がありました。
 - ・言友会のパンフレットをつくる。
 - ・ホームページに女性や学生専用窓口をつくる。
 - ・言友会のしての目標を設定する。「伝えたいことは今伝える」はどうか。

第2部 吃音がある児童のこたばの教室でのグループ学習・グループ活動について (報告文に代えて天羽先生の研究報告文を掲載します)

奈良市立済美小学校こたばの教室 天羽 郁子

奈良市立鳥見小学校こたばの教室 牛原 初美

1 はじめに

鳥見小学校のこたばの教室に通級してくる児童は、毎年ほぼ30名前後で、構音障害・吃音・言語発達遅滞・読み書き障害と多岐にわたっているが、ここ数年、吃音のある児童が増え、10名を超えるようになってきた。

吃音のある児童が多いと、呼吸法・発声発語指導や斉読法など吃音を軽減するための指導のほか、吃音理解のための学習をグループで行ったり、お互いの交流をはかるためのグループ活動を行ったりできるようになった。

ここでは、こたばの教室で行っている吃音がある児童への様々なアプローチの中で、グループ学習やグループ活動について、鳥見小学校こたばの教室での23年度までの実践についてまとめている。

2 吃音理解のためのグループ学習について

(1) 吃音のある児童が、吃音について正しく理解し、自分の吃音と向き合えるようになってほしいと思い、児童の発達段階に応じて、吃音についての理解の学習を行った。この学習は、グループ学習で行う方がよいと考え、吃音のある児童の指導時間を、同じ学校・同学年・学年が近い者同士で、同じ時間前後の時間にして、グループ学習がしやすいようにした。

(2) 吃音理解の学習を始める前に、保護者と指導者が、児童にとって適切な時期であるのかを十分話し合い検討したのち、下記のような内容で実施した。指導者も保護者も、吃音のある児童と「一緒に」という共感の姿勢を大切にしたい。

① 絵本「どもっても いいんだよ」を読み、吃音について話し合う。

② 絵本「どもるって どんなこと」を読み、吃音についての正しい知識を知り、自分の吃音と向き合う。

③ 絵本「中学生になるきみへ」を読み、中学生活での問題解決のヒントとし、進学への不安を取り除けるようにする。

④ 「第16回吃音親子サマーキャンプ」日本吃音臨床研究会制作のDVDや、吃音に向き合うためのドキュメンタリー映像集「ただ、そばにいる」企画制作北川敬一さんのDVDを、児童とともに視聴して、自分の吃音についての思いや悩みを話し合う。

(3) 吃音理解の時間をグループで行うことによって、児童どうしが、自分の吃音の状態や悩みについて話し合う機会ができ、自分の素直な思いや考えが出しやすかった。また、共感できる仲間が存在は、児童に大きな力を与えたと思う。このことによって、児童どうしのつながりが深まった。

3 グループ活動について

鳥見小学校のこたばの教室では、吃音がある児童が集まり、お互いに交流するための「お楽しみ会」を以前から不定期に行っていた。平成21年度頃から、吃音のある通級児童が増えてきたことと、こたばの教室の指導担当者が二人になったことで、吃音のある通級児童全員が集まる「お楽しみ会」を

学期末に定期的に行うようになった。

(1) お楽しみ会

終業式前で学習が午前中で終わるようになった日の午後、吃音のある1年生から6年生までの通級児童が全員集まった。お楽しみ会では、自己紹介をした後、グループ学習のときに考えたクイズや出し物をしたり、簡単なクラフトをしたり、ゲームをしたり、ドッチボールやおにごっこをしたりして、楽しく交流した。児童は、吃音があるのは自分だけではなく、多くの友だちが自分と同じようにことばの教室に通級し、またそれぞれの学校でがんばっていることに気づくことができた。

(2) ようこそ先輩シリーズ

吃音のある児童もその保護者も、吃音があるため、将来への不安を抱えている。その不安を少しでも解決へと導いてくれる情報が少なく、またあっても身近なものでないように感じていた。そこで、お楽しみ会に吃音がある成人の方をゲストとして迎え、自分たちの将来への見通しのひとつにしてほしいと考えた。

① 第1回目

平成22年度2学期末に、NHK「きらっといきる」吃音で紹介された奈良市社会福祉協議会に勤めておられるGさんをお楽しみ会のゲストに迎えた。Gさんは、ご自身の体験談を話した後、児童の悩みや不安を聞いてくださった。子どもたちは、今まで両親にもことばの教室の指導者にも打ち明けなかった悩み「進学や就職の面接のときに、しゃべれるかなあ。」「おかあさんになって、自分の子どもに、どうしてそんなしゃべり方なのと聞かれたらどうしよう。」などと話した。保護者も指導者も、子どもの悩みの深さに気づかされた。しかし、子どもたちは、自分の悩みや不安を打ち明けることができ、心が軽くなったのか、表情は明るくすがすがしかった。Gさんとの出会いが、児童の不安を解消し、安心へとつながったと感じられた。

② 第2回目

NHK「きらっといきる」吃音の番組の中で紹介された、Gさんと子どもたちの交流を視聴したSさんから、鳥見小学校のことばの教室にメールが届いた。「吃音があるわたしに何かできることがあれば、不安のある女の子に話ができれば。」というSさんのメールでの申し出に、平成23年度1学期末のお楽しみ会のゲストをお願いした。Sさんは小学生のお子さんを持つお母さんでもあり、また画家・イラストレーターとしても活躍されている。吃音がある女子児童に、将来の見通しと安心感を持ってほしいと思い、来校をお願いした。子どもたちは、Sさんと一緒に、「ハートの虹」という絵の共同制作をした。Sさんは、表現活動を通じて吃音を乗り越えてこられた体験を、子どもたちに話してくださった。母親になったときの不安をかかえていた女の子は、Sさんのお話を聞き、安心して元気づけられた。

③ 第3回目

平成23年度3学期末には、奈良言友会に参加している女子大学生のYさんと一回目のゲストのGさんを迎えて、体育館で思いっきり遊んだ。会を重ねるたびに子どもたちどうしも親しくなり、高学年の児童がリーダーの役割をしてくれ、遊びのプログラム作りやお楽しみ会の進行をしてくれるようになった。児童と年齢が近い大学生の参加は、児童にとってより身近な将来のモデルとなった。Yさんと児童は、すぐに打ち解けて楽しく一緒に活動できた。またGさんとの再会も子どもたちにはうれしいものだった。

(3) 吃音のある児童の保護者会

平成22年度3学期末には、児童がお楽しみ会をしている時間と並行して、吃音がある成人の方の体験談を聞くことと、保護者同士の交流会を行った。体験談は、子どもたちと交流してもらっているGさんをお願いした。子ども・中高生・大学生の時期、進学・就職・結婚・子育ての時期と、それぞれの時期に吃音について悩み、それを乗り越えてこられたGさんの話は、保護者に感動を与えるものだった。その後の保護者の話し合いでは、保護者の思いや悩みを包み隠さず語ってもらえ、有意義なものとなった。保護者も交流の場を必要とされていることを痛感した。

4 まとめと今後の課題

- (1) ことばの教室で吃音のある児童に何ができるのか、吃音を少しでも軽減し流暢性を高めていけないか、環境調整は十分できているのか、児童が吃音について正しく理解し、自己肯定感をもってきているのか、担当者は自問自答している毎日ではないか。私たちにできることは微力である。しかし、今までの実践を通して、ことばの教室の指導者として私たちは、子どもたちどうしのつながりをつくり、保護者どうしのつながりの機会をつくり、先輩である吃音がある成人の方々とのネットワークをつくって行くことが必要であると確信できた。
- (2) 教室ではできることに限界があるため、地域のことばの教室どうして連携していくことや、言友会などの地域の団体と協力し合えるように連携していくことが今後の課題であると思う。
- (3) その第一歩として、「吃音がある子どもたちのために、自分たちにできることはないだろうか」という奈良言友会主催で、ことばの教室の担当者も協力し、「ことばの親子交流会」を平成24年8月4日に行った。この機会を通して、今後も「吃音がある子どもたちのために、自分たちにできることをしていきたい」という同じ思いを共有し、奈良言友会とのネットワークを確かなもの、継続できるものにしていきたいと考えている。

<感想>

- 笠倉さんの発表は素晴らしかったと思います。
- 言友会のパンフレットを作ろうという笠倉さんの案は、大変いいと思う。言語聴覚士の先生も「奈良言友会」を知らない先生もいるので。(大阪の情報の方が多いようです。)
- ことばの教室の内容をくわしく知ることができてよかった。
- 今日は大変有意義な話を聞かせていただくことができました。吃音と付き合いながら前向きに生きていくヒントを得ることができました。
- 天羽先生が解説された学校での言語教育に感銘を受けた。勉強になった。子どもたちの将来に大きな影響を与えると思う。ただ、ことばの教育も小学生でとまってしまうことに疑問をもつし、中途半端で終わっていることに割り切れない思いが残る。
- ことばの教室の発声とかげんじょうがよかったと思いました。
- 前半の話合い、言友会の活動を前向きにするよう良い話し合いだったと思う。後半のことばの教室の取り組み素晴らしかった。発声、発語の練習だけでなく、お楽しみ会でどもっても友達と楽しく会話できた体験や、おとなの吃音のひとつとの交流でどもりをもって大人になってもちゃんとやっていけるんだと思える、そのような体験は中学・高校に行っても大きな力になると思う。
- 初めて担当させていただきました。スムーズにはいきませんでした。良い経験をさせていただきました。奈良言友会としての目標を決めたことはよかったです。天羽先生のパワーポイントを使っただけの吃音のある子どもたちに向けての活動は私が幼年時代に求めていたものでもあったので、ことばの教室に通っている今の子どもをうらやましくも思いました。

社会的支援について思う事

青木 明大

少し前、吃音のある人のための社会的支援が盛り上がりました。

- 社会的認知度の向上
- 医療機関の充実
- 障がい認定を含む就業支援

全国言友会連絡協議会では、社会的支援委員会を組織し上記の三つに取り組んでいます。私も委員会のメンバーでもあります。委員会は近頃は停滞気味であるように思います。その大きな原因は大風呂敷であること、明確なロードマップが示せていないことにあると私は考えています。しかし、セルフヘルプグループ(SHG)では、多くの人は仕事なり学業を抱えています。吃音という障がい(あえて障がいとします)は、目に見えない、症状や環境に悩みの大きさが左右されます。当事者同士でも悩みの大きさは異なります。時間がない上に、問題意識も大きく異なる当事者で、社会的支援の擦り合わせは大きな時間と労力を必要とするでしょう。社会的支援に何から何までSHGが取り組む事は、いささか効率が悪いようにも思います。本来のSHGの第一の目的でもある「わかちあい」から大きく逸脱しているテーマでもあります。

言友会では、若者の参加者が減っていることや、例会のマンネリ化など、目の前の課題が山積しています。悩める吃音者の為の活動が行えているでしょうか。岡知史さんの著書「セルフヘルプグループ」によると、SHGには三つの役割があります。

- わかちあい(慰め合うのではなく、気持ち、情報、考え方をわかちあう)
- ひとりだち(自分で決める、社会に参加する)
- ときはなち(自分を尊敬する、社会に働きかける)

これらは相互に影響を及ぼし合っています。

私も同感しています。私も悩んでいるのは自分だけではないと「わかちあい」をし、尊敬出来る先輩にであい、生きる指針を見つける事ができ、「ひとりだち」が出来るようになり、社会的支援の必要性を感じるようになり、情報を発信するようになりました。これは「ときはなち」ですね。私は、このサイクルを多くの方に体感することで、悩みが小さくなる吃音のある人がまだまだいると思っています。社会的支援も必要であると私は考えています。一人でも多くの方に「ときはなち」をして頂ければ、社会的支援の機運も高まるのではないのでしょうか。

まずは、「わかちあい」を見直していきましょう!

奈良言友会例会

日時：毎月第1日曜日 午後1:30 ~ 4:30

場所：奈良市はぐくみセンター (JR奈良駅西口 南へ歩3分)

奈良言友会 連絡先

堀 茂 〒636-0915 生駒郡平群町春日丘2-13-15

TEL/Fax0745-45-2857 090-9610-6393 Email: sigeru1030@yahoo.co.jp

奈良言友会HP <http://naragenryukai@hotmail.co.jp>

奈良言友会会報誌「まぼろば」編集発行 山崎 貴浩